愛の降る夜

山姥切長義×女審神者
令和４年２月２４日
著者：みやこ
URL：http://1105.velvet.jp/
※本書は非公式二次創作です。原作関係者様とは一切関係ございません。

審神者は悩んでいた。恋仲である山姥切長義との夜の営みについてだ。一度は彼と結ばれたものの、それ以降まったく進展がないのだ。

もともと審神者は淡泊で性欲は薄い方だし、問題はない。だが、長義は違うようだった。ひとりで処理する姿を見かけたときがあるし、時折欲を孕んだ目で見られることもある。それなのに彼は初めての夜以降、審神者に触れようとはしない。

（……私、なにか粗相をしてしまったのでしょうか？）

よほど浮かない顔をしていたのだろうか。加州清光が「どうしたの？」と声をかけてきたので、悩みを打ち明けることにした。

「そんなことかあ。もっと深刻なことだと思ったよ」

話を聞き、加州は呆れたように言った。

「ここは主から誘っちゃえばいいんじゃない？　それで駄目だったら、そのときはまた考えればいいじゃん？」

「そ、そうですね。ですが、どうやって誘えばいいのか……」

胸の前で組んだ手をもじもじさせながら審神者がそう言えば、加州はうーんと首を傾げたあと何か思いついたらしく、ぽん！と手を打った。

「もういっそ、主が押し倒しちゃえばいいんだよ！」

「ええっ!?　でも、それはちょっと恥ずかしすぎます……！」

審神者が慌ててそう返せば、加州は「大丈夫だって！」と根

拠のない励ましの言葉を口にした。

「主みたいな真面目で奥手な子から誘われたら、きっと嬉しいと思うよ」

自信持ってよ、と肩を優しく叩かれる。

そんな風に言われてしまえば断れない。審神者はこくりと頷くと、拳をぎゅっと握りしめて答えた。

「わかりました。……今夜にでも実行してみようと思います」

「うんうん、頑張って！」

応援してくれる加州の笑顔が眩しい。審神者は力強く「はい！」と答えてから、執務室へと戻っていった。

その夜。審神者が長義の部屋を訪ねると、彼はすでに寝間着姿で布団の上に座っていた。「どうかしたのかな」と尋ねてくる声は優しいが、どこか緊張の色が見える気がするのは気のせいだろうか。視線をそらす長義に少しの寂しさを感じながら、審神者は彼の側ににじり寄って、それから思い切って抱きついた。

「！」

驚いたように彼が息を呑む気配が伝わってくる。審神者はぎゅっと強く彼に抱きついて、それから勢いのまま押し倒してみた。

どさりと背中が布団に沈む。その上に覆い被されば、長義は

愛の降る夜

「え、えっ……？」

「は……、え……？」

ちゅ、と音を立ててようやく唇が離れる。長義は荒くなった呼吸を整えながら、審神者の頬を指先でなぞった。

「俺は我慢していたんだよ？　初めての夜、きみが辛そうだったから、まだ俺たちには早いのだろうと」

だから、次の日から触れることができなかった。彼はそう囁くと、審神者の唇に優しく口づけを落とした。

「きみから求められるがままに、嬉しくてどうにかなりそうだ」

長義は熱のこもった瞳で審神者を見つめた。

「俺がどれだけきみを想っているか、教えてあげよう」

戸惑った様子に瞬きをした。彼が何か言おうと口を開こうとするので、塞ぐように唇を重ねる。恥ずかしさはどこに限界を突破済みだ。だが、ここまで来てしまったら戻ることはできず、先に進むしかない。思い切って彼の開いた唇の合間から舌を滑り込ませると、長義はびくりと体を震わせた。

「……っ！」

審神者の体を押し返そうとしていた彼の手が、逆に審神者の体を強く抱き寄せる。隙間なく密着し、そのまま口づけを交わし合う。舌を絡め合い、唾液を交換する。長義を押し倒していたはずが、気がつけば審神者が組み敷かれていて、食べるように キスをされていた。